

KC-HRD（旧磁気記録研究会）の歩みと専門職、自己へ挑戦

堀内義章

1 KC-HRD の成り立ちと今年までの経過

平成7年（1996年）4月29日に第1回の磁気記録研究会が9名の参加で、日立マクセルで開催された研究会も、途中名前が変わり（関西産官学人材育成研究会〈通称KC-HRD〉）、3年前には、筆者も幹事を引き受け、今年で22年になる。開催は年2回。その間に、発案者の松下電器（現パナソニック）の菅谷さんが亡くなり（1999年）、核となる後任として中心になれる元東北大学の中村先生が後を引き受けてくれたお陰で、ここまで続けられたものの、中村先生も今年（2018年）から、この研究会をリタイアされた。それでも各会社持ち回りで、継続できたのは、リード役の幹事会社（現在は戸田工業の土井さん）のお世話のお陰である。やはりこの間、思い出に残るのは、大阪を中心に、色々な地域へ行ったことも特筆すべきだと思う。宮城の東北大学通信研究所（2004年、中村さん）、岩手の岩手大学（2014年、中村さん）、東京のパナソニックの東京展示場（？、田沼さん）、岡山の東方美術館（2017年、角谷さん故郷で美術館を運営）、広島の戸田工業（2016年、土井さん）など、印象に残る。持ち回りの会社は、パナソニック（元松下電器産業）、三洋電機（現パナソニック）、三菱電機、日立マクセル、大阪大学（田沼さんがパナソニックから移籍）、関西大学、戸田工業などである。悩みは、段々と現役メンバーが減少してきたこと、それぞれ転職で、職場が変わったりして、運営が段々と厳しくなっているが、幹事会で論議しながら、前へ前へと検討をして続けている。今回の過去のまとめの話も、角谷さん（元日立マクセル、現・関西大学）の提案で、実現している。

伝え聞き所によると、この関西磁気記録研究会（現KC-HRD）は、垂直磁気記録学会の開催を、宮城の仙台か、和歌山かで、論議があったが、結果的に宮城の仙台に決まり、それまで関西で結束してきた磁気記録関係者で勉強会を開こうということで、発足したと聞いている。そこには、元々VTRなど関西でそうそうたるメンバーが集結していたようだ。

筆者がこの会に参加した契掛けは、生前に松下電器（現パナソニック）の菅谷さんから、学会で会った時に、いま面白い研究会をやっているので参加しないかと誘われ、筆者は、第6回の平成9年（1998年）2月6日から参加した。まだ現職で三洋電機（現パナソニック）に勤務していて、幸いにも磁気記録関係では、中央研究所でビデオヘッドの材料（フェライト単結晶）の開発からVTR用オープンリールタイプ、ベータ、VHSのVTR用、8ミリムービー用ビデオヘッドの開

発および VHS 用・8 ミリ用ドラムの設計・導入・販売・マーケティングと一貫して行った。その間に VTR の高画質用として MIG (メタル・イン・ギャップ) ヘッドを導入していたが、本来は DAT (デジタル・オーディオ・テープレコーダ) 用に開発していた MIG が、DAT が民生用 (アーカイブ用 DAT として産業で導入) に導入されなかったため、何とか応用できないかと考えた結果、HDD 用への応用を行った。1990 年頃から、三洋電機として HDD 関連用ヘッドとして MIG で参入。その時分はまだ 50MB の時代であった。筆者は HDD ヘッドに関しては、主にマーケティングを中心に対応した。その簡に、国際ディスクドライブ協会 (現 IDEMA JAPAN) の設立期 (1991 年) に HDD 用ヘッドのマーケティングの必要性から入会の段取りしたり、同じ年の SRC (ストレージ研究開発機構) の設立時には、その準備委員として 1 年間行い、設立発足時に担当部長へバトンタッチして経緯がある。その後、MR ヘッド、GMR ヘッド手掛けたが (ただし、HDD そのものを持たないため、HDD のウエハーでの出荷)、GMR は巨大設備費用のため、撤退を表明し、投資した約 30 億円を回収するために、設備売却リーダーになり、約 1 年半をかけて、15 社に設備を販売、約 8 割を回収した。その間に各社 HDD メーカーの設備売却に当たり、会社の決定の仕方や支払い方法、技術レベルや考え方など、その裏側を見た気がする。その後は、事業部の一部部品を含めた HDD を中心としたマーケティングを担当し、2001 年に満 60 歳で退職した。その意味で、この研究会には、毎回、「ストレージや HDD の業界動向、世界経済」などのプレゼンを毎回行い、筆者にとっても年 2 回の節目にまとめられるのは、非常に勉強になった。

2 三洋電機時代の研究開発・量産化・販売・マーケティング

1965 年 (昭和 40 年) に、三洋電機・中央研究所に配属になり、磁性材料を研究している家村研究室に配属された。入社前から研究所を希望していたが、なんとそれが通じたのには驚いた。この時期に研修室の責任者 (故土井勝氏) が、東北大学の岩崎先生の所に社内留学されていて、その関係で岩崎俊一先生 (垂直磁気記録の開発者で、文化勲章受賞) との交流も始まった。この時期にはソニーは工業用 VTR を製品化して販売していたが、我々は、この工業用 VTR 用ビデオヘッド開発をテーマにして、磁気ヘッド用磁性材料の開発から始まった。Mn-Zn 系と Ni-Zn 系多結晶の開発を色んな組成を変えて開発し、Mn-Zn 系で多結晶材料開発、それを今度は単結晶フェライトとして、開発を進めた。1970 年の吹田の大阪万博時には、センダストと多結晶を組み合わせた工業用 VTR ヘッドを開発、実際に工業用 VTR に組み込んで、大阪万博に展示した。そのお陰で、大阪万博中は、機器のメンテのためフリーパスをもらい、早いうちの米国が持ち帰った月の石も楽々と見られた。都合 8 回ほど会場へ行った。民生用 VTR 用ヘッドを事業

化すべき7年間研究所で開発の後、大東市・住道の工場へ移管し、3年間の量産試作の後に、オープンリールタイプVTR、Vコード・VTR（三洋独自のカセットVTR）やベータVTR、VHS・VTR、8ミリ用ヘッド等を量産導入した。単結晶フェライト作成のため徹夜で温度分布を測定したり、また、オープンリールVTRの量産時には、ビデオヘッドの開発が出来ずに、ソニーから購入という屈辱を味わいながら、2~3カ月近く徹夜に近い仕事をこなし、約6カ月掛かって、量産に導入した経緯もある。働き方改革で、専門職に近い人は残業が無制限のような扱いになりそうだが、我々研究者・技術者は、ここぞというときは、根を詰めてやらねばならない時があり、これらの制度には賛成したい。社内向けに出荷していたビデオヘッドも、やはり外販がないと競争力がなくなるということで、それまでVTRを製造していた事業部から、部品事業部へ移管して、一から外販を始めることになった。そこで、内部の開発技術とセールスエンジニアの両方を担当しながら、開発を進めた。その間にVTR用ヘッド以外に、ビデオヘッドと磁気テープのインターフェースを決めるドラム設計の開発も担当し、VHSや8ミリドラムの設計・開発導入も行った。そのこうしているうちに、内部の技術や外部のセールスエンジニアを担当するかを選択の時に、社外を選択しセールスエンジニアとして更に外部での人脈を広げた。外販ゼロからのビデオヘッド部品も、大手VTRメーカーに次々と導入し、かなりのシェアを取った。例として部品事業部で開発生産したため、同じビデオヘッドを社内向けと他社向けに出し、雑誌のVTRの商品評価で、社内はB評価、社外はA評価を受けるということもあり、画質は総合で決まることを証明した感じで、事業部移管した効果を感じた。また、VHSのドラム、8ミリのドラムも外販することが出来た。ほぼVTR用が落ちた後は、HDD用ヘッドの参入ということで、一からこの分野のマーケティングを行った。しかし、技術の進歩は目覚ましく、あれだけ苦勞して開発・生産導入・販売まで行ったVTRや8ミリ用ドラムも、メモリやHDDの出現で、一気に骨董品になり、そのHDDも一部、メモリに置き換えられてきている。時代な流れは、インターネット時代に入り益々スピード化。今後は、「ビッグデータ」「IoT（インターネット・オブ・シングス）」「人工知能（AI）」「ロボット」などが、次世代を担う技術として、今後の時代の鍵を握る技術になってきている。さらにはスーパーコンピュータから、量子コンピュータへと時代の移り変わりは甚だしい。

出願し特許・実用新案になったのは40件、その内、「ビデオヘッドでは、片絞りのトラック製作では、エッチング方式で無歪加工した特許」「ドラムの径の上下差を付けて組み込んだり、同じ径で、入り口と出口のドラムをずらして組み込む方式」などが有効であった。

3 入社2~3年目に経験した色々な出来事で決まった生き方

会社に入社して 2~3 年で色々な経験を行い、60 歳までの大きな計画を立てた。

- (1)「大阪労演の演劇で、死に際を見て死ぬまでに一杯語れる人生を送ろうと決めたこと」

研究所の仲間に誘われて、題名は覚えていないがある演劇を見に行った。概要は、「ある男性が 60 歳で、まさに死のうとしていた時、自分の人生を振り返った時、何も語れる人生がないと、ああ無なしい人生だった」と語って死ぬ場面を見て、死に際に一杯語れる人性を過ごすために、色々な分野にチャレンジしようとしたこと。

- (2)「NHK の岡本太郎氏の文化講演を聞いて、時間の有効活用をしようとしたこと」

岡本太郎氏が、ラジオの講演で「もしあなたが明日死ぬといわれたら、どうしますか。限られた時間を、有効に活用するだろう。それがもし、明日でなく、1 週間後、1 カ月後、1 年後、10 年後、20 年後と考えていくと、同じことで、今の時間を有効に使うことが、大切だと教えてくれたことだ。それから、年間計画を作り対応したこと。

- (3)「会社の寮の寮長を命じられ、そこで人を使う方法を熟得したこと」

枚方の僅か 90 名の寮長だったが、新しい寮を 2 棟増やして拡大し 400 名の寮長になった。だが、旧寮生は、食事と風呂は、新寮の方へ行くようにとの会社からの伝達があった。しかし、旧寮生は、なんで元居た寮生が、不憫目に遭わなければいけないかの議論が盛り上がり、寮費の不払い運動まで行って、結局、厚生課長から全て、従来通りの回答を得たこと。この時初めて、寮生大会に、厚生課長を呼んで現状を見てもらい聞いてもらった。後で聞いた話では、今まで多くの寮を見てきたが、これだけ不満がるとは知らなかったと、即、了承されたことだ。この時、寮生は、勤務事業部や職種も違うために、中々になの意見を聴くことが出来なかったもので、提案し、「各階の階別リーダーを決め、そのリーダーにまとめてもらい意見を吸収したこと」が皆の意見をまとめるいい結果を得たこと、寮生、会社の厚生課のとのいい意味での橋渡しができ、人を動かすノウハウを得られたこと

- (4)「世界の冒険家・藤木高嶺さんの 3 部作“アラブの遊牧民”“パプアニューギニア”“カナダエスキモー”に出会ったこと」

朝日新聞にこれら 3 部作が掲載され、後の書籍にもなったが、今まで国内は割と旅行したが海外は、殆ど行っていなかった。藤木氏の本により、地域や気温が変わると価値観が異なることを知り、世界への目を広げていった。初めての海外は、香港・中国・広州で、会社の組合旅行で 5 日間訪問した。国境はどんなものかと必死で飛行機から覗いていたのが、今でも思い出させ

る。現状は 80 カ国訪問している。今、藤木高嶺氏が主宰している「高嶺会」あり、私も所属して、親しくしている。既に 92 歳だが、基本は「チャレンジ精神」。私のこの精神を忘れずに日々邁進している。

- (5)「日本の古い伝統文化である“茶道”の道に入り、7 年間、茶の精神を養わない、これが筆者の生活の基本になっていること」

田舎の福岡・飯塚から大学・就職と関西となったために、何か関西の古い伝統を学びたいと思い、京都の「裏千家・茶道」を選んだ。24 歳から約 7 年間、京都へ週 2 回通った。幸いに担当した先生が、女先生が福岡出身で、男の先生は、茶杓の鑑定家で、茶杓に関する多くの鑑定した本も出されている。京都の京阪三条の近くで、枚方からは交通の便が良かったので、週 2 回、7 年間通うことが出来た。この時の社の精神が、今でも人を理解するのに役立っている。両先生は、今は亡くなられていないが、出稽古にいられていた先生に、最近、初釜に呼んでもらっているほか、京都の梨木神社の月釜や、2～3 の先生からのお茶会、東京の京王百貨店の茶室には時間があれば寄っている。茶は、私の精神の支えだ。将来は、自分で作った茶道具でお茶会を開きたいと思っている。

- (6)「ボランティア活動を行ったが、偽善団体であることが分かり、直ぐ止め、ボランティアに対して慎重になったこと」

ボランティアに対する精神は持っていたが、若い時は偽善か慈善かの判断が難しく、儲け主義だったので、幹事を止めた。それからしばらくは慎重だった。幸いに会社勤務時代に後半に、ボランティア休暇が 6 日間、有給休暇は別にあり、フルに活用した。今覚えているのは、1995 年の阪神・淡路大震災で、4 間ボランティア休暇をとって、神戸の長田で活動したり、福井県のロシア船のコールタールの海岸での回収、第 3 回アジア競技会が大阪で開催されたときに 3 日間入り、守口市のバレーや大阪市のボーリング、サッカー等に参加して、楽しい思い出を残している。現在は、3 つのボランティア、すなわち、一つは一般社団法人 南太平洋協会（主にオセアニア地域の支援と旧暦カレンダー発行、海外留生の支援と、海外ボランティア＜パプアニューギニア＞）、2 つ目は民博ミュージアムパートナーズ（MMP）で、吹田にある国立民族博物館のボランティア、3 つ目は災害ボランティア・ダッシュ隊大阪の会員で、2011 年の東北震災から立ち上げ、毎年、西日本中心にボランティア活動を行っている。

- (7) 本を少なくとも年間 50 冊は読もうと決めたこと

福岡・飯塚に高校時代まで住んでいて、実家はなんと本屋（現在は閉店）で、手伝いがばかりで、本を読む暇がなかった。そこで何とか大阪へ出てきて、自分なりに本を読もうと決め、会社に入社した 1965 年に 20 冊読めたの

を覚えている。しかも年間目標 50 冊を立てた。現状は乱読で、ほぼ年間 400 冊を目標に継続している（多いときは 800 冊読んだこともある）。最近は必要以外、図書の本が中心である。また 1972 年に枚方で「枚方文学の会」を立ち上げ、主に読書と講座を中心に活動し、5 年後の 1977 年に同人誌「法螺」（現在 76 号）を発行。現在も続いているが、筆者は、2 度くらいしか投稿していない読書は居ながらにして、多くの知識と疑似経験ができるので、今後も継続の予定である。

以上の事柄を、入社 2~3 年で経験し、筆者が決めたことは、次の通り。

- (1) 一生やれる仕事（技術）で、生きること。リタイア後も継続してやれる技術を身につけること。企業では専門職で生きること（現在、細々ながらストレージのアナリスト仕事が続けられていること）
- (2) 世界の国々を見るために、少なくともの 100 各国以上を回ること（世界は 198 カ国で、現在の訪問国は 80 カ国）
- (3) 読書は、少なくとも年 50 冊を読むこと（現状は年 400 冊）
- (4) どんな分野でも自分が知らない分野には、チャレンジすること
- (5) 30 歳までに結婚すること（残念ながら、いまだに未婚）
- (6) いずれボランティア活動を再開すること（現在 3 団体）
などを決めて、生きてきた。

4 社外活動と趣味

不思議と、会社在职中でも多くの社外活動を行っていて、現在も続いている。そのお陰で、色んなメンバーから声掛けがあり、結構、多忙な日々となっている。また、可能な範囲で多くのお世話をしている。以下が、筆者がお世話したり、活動したりしている団体である。

○団体・任意グループ

- (1) 個人事務所「HORI Technology Office」（代表）
- (2) 一般社団法人「南太平洋協会」（副理事長）
- (3) 一般社団法人「災害復興支援協議会」・ダッシュ隊大阪（会員）
- (4) 民博（国立民族学初物館）ミュージアムパートナーズ（MMP、会員）および国立民族学博物館・友の会（会員、準備段階から）
- (5) 日本旅のペンクラブ（会員、毎月関西西部で開催）
- (6) さくら会（会員、毎月開催）
- (7) 大阪工業大学 校友会（参与、年 3 回）、電子クラブ（相談役、年 3 回）
- (8) 日本 HDD 協会（IDEMA JAPAN、協賛会員＜理事待遇＞、2~3 カ月に 1 回、セミナー、技術部会、理事会）

- (9) KC-HRD (関西産官学人材育成研究会、幹事、年2回)
- (10) 裏千家「淡交会」(会員)、京都芳秀会(裏千家茶道)メンバー(不定期)
- (11) 枚方文学の会「法螺」(同人、年2回発行だが、殆ど投稿無し)
- (12) 「楽酒の会」(世話人、事務局・会計、毎月開催)
- (13) 御殿山テニスクラブ(会員、週1回)
- (14) 蝮会テニスクラブ(世話人、年3回)
- (15) 京都創政塾(政治家を育てる会)会員(不定期)
- (16) L&L21 親睦団体 世話人(年3回)
- (17) 帆船「あこがれ」乗船メンバー・世話人(年1回)

○趣味

(1) 絵の鑑賞と自分でも書くこと

現在では、殆ど、絵の鑑賞が主で、自分で書いたのは「クロッキー」と「絵手紙」の試し版に参加したぐらいだ。書きたい意思はあるが、まだ時間的に余裕が取れないので、もう少し落ち着いたら、スケッチを始めたい。

(2) 国内外旅行

国内の主なところは、旅行し、現在は温泉を中心に訪れている。今年はずでに、兵庫の有馬温泉、別府の鉄輪温泉、大分の久住高原温泉、鹿児島霧島の霧島温泉などに行った。海外は、現在、80カ国で、中々これから増えない。場所と日数、費用が厳しいため。今後は、アラブ首長高連邦、中央アジア5カ国、キューバ、バングラディッシュ、ケニア、アイスランド、キエフ、ベラルーシなどに行きたいと思っている。

(3) 健康(テニス、歩くこと、週2回のサウナ)

基本は、週1回のテニスが基本で、40歳から続けている。中々上手くはならないが、まだ体力的に可能なのでやれるうちは続けたい。テニス仲間も楽しいメンバーがいるので。また、週何に何回かは、歩く(ほぼ1万歩以上)。淀屋橋―梅田―天六―天満コースや、淀屋橋―難波などは、よく歩く方だ。サウナは、週2回、風呂屋で入る。そのお陰だ、真夏でもクーラーは設置していない。体が、自然の暑さに慣れているが、むしろクーラーは、一時はいいが、あとは苦痛だ。汗をかくと体が楽になる。

(4) 茶道

24歳から始め、今は精神生活の支えになっている。一杯の茶碗から、世界の幸せが呼び込める気がする。現在は、京都、大阪、東京の茶会でお茶を飲むだけになったが、茶の精神は根底に潜んでいる。また、大阪府交野市にある「吉向窯」は、毎年、手作りの大茶会を開催されていて、自分の茶室で、その年の見立てで、全茶道具を焼いて(釜から、水指、茶入れ、茶碗、菓子皿など)、

もてなしをされ、地元の料理とお酒を飲み、料理の入った四角皿をもらってくる会である。今年で30回目とか。多分、6回目くらいから連続で参加している。また、今年、1~3月に、池田の菊炭（千家が使う炭点前用）を、作る機会があり、クヌギの木の伐採から最終の炭焼きまで行い、茶を嗜む人間としては大変勉強になった。実は、南太平洋協会でも、ドラム缶で炭焼きを行っていて、国内や海外（パプアニューギニア）で、数多く焼いているのでその比較が、参考になった。いずれ、すべて手作りの道具で茶会が開ければ思っている。

(5) アルトサックス

楽器に弱いというか、まったく楽器は弾けない。ただ、ジャズが好きなので、いずれアルトサックスを弾きたいと思って、40歳の時に購入したが眠っているままだ。会社を辞めてかしばらくして、心齋橋の楽器店に、個人レッスンで約2年（月2回）習ったが、残念ながらものに出来なかった。最初は良かったが、教え方が途中から変わり、これではマスターが難しいと判断して、止めた。でもいずれまた、チャレンジしたいと思っている。今度は、独自でマスターしてみたい。

(6) 読書

家が本屋だったにもかかわらず、田舎にいる時は殆ど本を読んでいない。父が読書はで多くの本を持っていたにもかかわらずだ。そこで、関西に来て、少しでも本を読もうと努力し、今は乱読であるが、年間400冊は読んでいる。本は時として、時間を忘れて電車を乗り越したり、途中でやめられず徹夜で読んだり、作者に感想文を送ったらその返事が来たり楽しみも多い。また、時間を有効に活用する隙間時間の活用にもなる。いずれ読む側から、読まれる側つまり出版したいとは思っている。テーマは持っており、当面は「若く生きるコツ」と「海外ボランティア・パプアニューギニア奮闘記」を、出版したいと思っている。

5 リタイア後の活動

今年（2018年）の誕生日（8月25日）に喜寿になった。父が71歳、母は95歳で永眠し、父は超えたが、母までにはまだまだ時間がある。幸いに会社で仕事をする傍ら、社外の人脈が多くできた。色んな所に憶測なく出掛けられる気軽もあったと思う。幸いにも、在職中は、専門職として過ごせ、また独身ともあいまって、いろんなことが、自分の判断一つで出来た。専門の仕事と趣味、ボランティアの3つが絡み合って前進している感じだ。筆者が自分自身よかったことは

(1) 専門分野をライフワークとして行い、バランスのとれた生活をしていること

(2) 人と比較しない生活をしたこと。我は我の考え

- (3) 人の悪口や陰口をこぼさなかったこと
- (4) 常に前向き考えで、何か起これば、これからどうするかを考えた後に反省
- (5) 各種分野で、違った関連の人間交流があったこと
- (6) 人のお世話は、無償行為で自然に行っていること
- (7) 現状では、全ての人にお返しする積もりで接していること
- (8) 笑いの世界に、好感を持っていること

現在は、個人事務所「HORI Technology Office」を2003年に立ち上げ、講演やセミナー、IDEMA JAPANの仕事を手伝い、2008年から「ストレージ月間業界情報」を、毎月発行している。内容は、主な新聞、情報誌、展示会の情報を月度で分野別にまとめているもので、これは筆者自身の毎日の情報収集と勉強であり、その前日に起こった情報は、ストレージを中心に、政治、経済、各国の動きや面白い情報等をまとめている。始めてほぼ10年になる。毎日のライフワークとして可能な範囲継続したい。

他の人にとっては、小さな幸せかもしれないが、筆者にとっては、ほぼ思い描いた人生を送っている。若さの秘密は、やはり常にチャレンジすることと思う。どんな良いことでもマンネリは起こる。その時に新しい分野にチャレンジすれば、また新たな脳が活発化し、新たな活性化が生まれる。これは、104歳の時に日野原先生から聞いた話で、「なぜ日野原氏が、次々と違った分野にチャレンジするかといえば、常に新しい活性化が生まれるので、チャレンジするのだと」。

6 100年時代を見据えた喜寿から眺めた過去と今後について

100年時代を迎えて、昔は人生60年、そして人生80年、今は人生100年時代である。これには、相当早くから準備しないと、時間を余してしまうことになる。恐らく定年が70歳時代を迎えると思うし、それでもそれに伴う資金も相当必要になる。筆者は60歳でリタイアしたが、幸いに厚生年金と企業年金があり、東京へ行く経費は、レポート代で補っているが、それでも退職時の年金から（筆者の時は、ちょうど61歳支給になり、1年間は失業保険でなんとか、食い繋いだ）考えると、退職時の7割の年金になっており、非常に厳しい生活となった。大きな天引きは、介護保険、高齢者医療保険など75歳を過ぎると急に増え、益々生活が苦しくなるのが、実情である。かつ、医療機関にかかる割合が増えてくるのでその辺を踏まえた、100年時代の資金計画が必要だ。今はまだ筆者も元気動けているが、これが動けなくなると、全ての機能がストップする。

従って、100年時代を生き抜くには、

(1) 体力アップ

まずは、健康で生き生きが必要。幸いに筆者は、毎週テニスを行っている関係で、毎朝のストレッチと寝る前の筋力アップは欠かせない。朝起きて、寝床

で、まずは「ブリッエンドを左右 100 回ずつ」「ダンベルを左右で上下 100 回、腕で左右 50 回、左右前後に各 50 回」、足を前後に 50 回（左右の足）、足首を左右に 50 回、前後に 50 回、両足首の開きを 30 回（左右の足）、腹を挙げて反る形で上下 50 回前後する、体を左右に 5 回ずつ振じる、足を立てての腹筋 100 回。これで約 25 分の朝の筋トレ運動。また寝る間には、細ゴムを二重にして、両腕各 50 回引っ張り、頭上の肩幅にゴムひもを挙げて 50 回引っ張り、腕を広げる形で 30 回引っ張る。これば筆者の筋トレの全ての動作である。参考になればと思う。筋肉は歳をとっても筋力アップができ、血液の通路と体を支えている重要な筋肉だ。筆者は 50 歳ころが継続している。

(2) 専門職とボランティア、趣味のバージョンアップ

やはり一生やれる専門職が重要だ。好きなことは、飽きないといわれるが、まさにその通りで、これから百歳時代を生き抜く重要なポイントだ。筆者は、専門職で生きてきたので（当分は、ストレージと HDD、世界動向を追いたい）、それを中心に、色んな興味のあるものへ拡張してゆきたいと思っている。読書の継続「年 400 冊」で、色んな分野を吸収に努め活性する。ボランティアは、現在、3 つ行っており、いずれも重要だ。この中で、（一社）南太平洋協会は、重要な位置付で、昨年、松村健司理事長が現地のパプアニューギニアで亡くなったので、その後継を育てねばならない。柱は、「旧歴カレンダーの発行」「ドラム缶式炭焼きの拡大と卑弥呼（炭火入れ）の講習」「海外ボランティア（特にパプアニューギニア）で、力を入れているところである。

(3) 財政的な裏付け

今後、100 歳まで生きようと思うと、医療含めた費用が多くかかる。年金だけでも、とてもではないが、財政的には厳しいだろう。そこで趣味と実益を兼ねた自己の会社を興すことだ。そのためには、やはり 50 歳代からの準備が必要だ。筆者は幸いなことに、年金と企業年金があるが、それでも年々保険料が増えて、段々と余裕がなくなっている。新会社を起こすか、本を書いて、稼ぐか今後の課題だ。

筆者が考えるタイムテーブルは、

- 20～30 歳代：自分の生き方を考える。特に、老後の自分のライフワークの決定が必要
- 30～40 歳代：専門職に専念し、自己の強みを持つこと。体力づくり
- 40～50 歳代：リタイア備えた外部人脈の構築、セカンドワークを持つこと、または独立のための資金段取りおよび体力づくり
- 50～60 歳代：定年後に備えた資金計画、独立。自己の各種記録をメモリで遺言として残しておくこと

- 60～70 歳代：定年が 70 歳になる可能性があるので、その時は残るか独立かを決める
- 70～80 歳代：自己の専門を生かした在宅勤務か、自社会社の設立
- 80～90 歳代：何事の縛られず、自由な発想の生き方
- 90～100 歳代：健康に留意し、最後の 10 年をハッピーエンド終わるように

7 むすびと今後の生き方

簡単に K-HRD の活動の歩みと今後について述べ、多岐にわたる専門、ボランティア、趣味について語ってみた。この研究会が続く限り、プレゼンは続けたいと思っている。筆者も喜寿になり、あと何年生きれるかは不明だが、専門のライフワークを生かしながら、ボランティアと趣味に奔走したい。また、旅が好きなどで、現在所属している「日本旅のペンクラブ」のメンバーと、温泉を中心とした温泉巡りや違った土地を訪れ、新鮮な地域の良さを味わいたい。そして、昔からまだ実現していない、下記にチャレンジしながら、今後も攻めの気持ちで生きたいと思っている。

- (1) スケッチ、アルトサックス、小説の完成
- (2) 世界 100 カ国の訪問の実現
- (3) 読書、毎年 400 冊
- (4) 技術士、旅行取扱責任者へのチャレンジ
- (5) 英会話、スペイン語の習得

(提出：2018 年 9 月 4 日)



【略歴】

堀内義章（ほりうちよしあき）

HORI Technology Office ストレージアナリスト

- ・ 1941年8月25日 東京で生まれ、福岡県飯塚で育つ
- ・ 1965年 大阪工業大学電子工学科卒同年 三洋電機（株）、中央研究所・事業部にて、磁性材料、ビデオヘッド、VTR用ドラム開発・生産導入、その後営業技術としてHDD用ヘッドマーケティング
- ・ 1997～98年にIDEMA JAPAN 理事、その後、企業のHDD撤退で、協賛会員として継続活動中
- ・ 2001年 三洋電機（株）定年退職
- ・ 2002年に個人事務所HORI Technology Office 設立、レポート、執筆、セミナー講師、講演の活動を現在も継続中。
- ・ 2004年：日本大学大学院 総合社会情報研究科 国際情報専攻終了、京都創政塾修了。

（所属団体）

本文中述べた通り

（所属学会）

・ 電子情報通信学会 ・ 映像情報メディア学会 ・ 国際情報学会 ・ IDEMA JAPAN